佳作

「妹へ」生きていてくれてありがとう

東京都　江東区立東川小学校 三年　大重 礼

「ピーポーピーポ」救急車の音が鳴りひびくお父さんお母さんがすごくあせっている。ぼくの目からしずくが落ちた。目の前の妹は白目をむいて、ビクビクとけいれんをしている。「神様、妹を助けて下さい。」けれど神様はそんなにやさしくはなかった。なぜならば、ぼくの所に妹が帰ってきて、ぼくの知っている妹じゃなかったからだ。

ぼくの後をついてきて、ぼくのおもちゃをとって遊んでいた妹ではなく、目の前にいる妹は赤ちゃんに戻っていた。立つ事も話す事も食べる事も、そして笑う事さえできなくなっていた。

ぼくはつらかった。泣きたいくらいつらかった。でも少しでも妹にボクを思い出してもらおうと目線があわない妹にぼくはたくさんはなしかけた。

妹にリハビリという生活が始まった。ＰＴＯＴというリハビリで、トランポリンやブランコで訓練をするものだ。ぼくも時々いっしょにやったりして遊んでいる。妹は少しずつ笑いがでてきた。

時々お母さんを取られた気分になる時があるけど妹がぼくの顔を見て笑ってくれるようになったし、時々お母さんと二人でパフェを食べたりして妹にないしょにしているから。

「いいよ。お母さんをかしてあげるよ。」

妹は今、養護学校の一年生。頭の中はまだ一才ぐらいで、言葉も「あい」しかしゃべれなくて「はいはい」で移動するだけだけどぼくに最高の笑顔はすごくかわいい。

ぼくが、お母さんに叱られると、妹がぼくにキスをしてにこおと笑ってくれます。

プールが大好きで、二人でビニールプールに入ると「キャーあい」といって喜んでいるすがたにぼくもいっしょにはしゃぎます。でも、目をはなすと水を飲んだりすべっちゃうのでお兄ちゃんのぼくは大変です。

どんな姿でもぼくにとって大切な妹です。

世の中には、色んな人がいると思う。ぼくは妹の姿を見て医者になろうと決めました。

そして、絶対に妹をもっともっとよくしてあげようと思いました。

「お母さんがぼくに妹はお兄ちゃんのそばにいたかったから、病気とたたかってがんばって戻ってきたの。ものすごい悪い病気だったから、色々とられちゃったけど命が助かっただけでもすごいのよ。本当にお兄ちゃんの事が大好きだからね」といった言葉を今でも覚えてます。たった二人っきりの兄妹。

妹の笑顔で何度もはげまされている。それはぼくだけじゃなく家族みんなそうだ。妹の笑い声、笑い顔でみんなが明るくなっていつも楽しい。妹が障害をもった事は家族にとってとてもつらい事だけどそのおかげで家族はいつも一つだよ。だから「妹へ生きていてくれてありがとう。」「これからもずっといようね。」

「大好きだよ。」